

時間地理学からみた 構造化理論についての一考察

——地理学における構造－主体論争とのかかわりを中心にして——

野 尻 巨

キーワード：時間地理学，構造化理論，ギデنز，構造－主体論争，
社会的再生産

- I はじめに
- II 地理学における構造－主体論争
- III 時間地理学の方法論
- IV ギデنزからみた時間地理学
- V 地理学者からみた構造化理論
- VI 結び

I はじめに

英国の地理学者の Gregory (1978) が嘆いたように、地理学者は過度に空間性を重視し、社会学や人類学における社会理論に関する知識が欠如しているのかもしれない。そのようななかで、社会学者と人文地理学者のゆたかな交流の事例として、ギデنزの構造化理論と時間地理学研究の相互交流があげられる。

Giddens (1976) : “*New Rules of Sociological Method*” と Giddens (1979) : “*Central Problems in Social Theory*” において、主体の行動と社

会構造の相互依存が論じられるとともに、構造化理論をとさえ、時間-空間の枠組みの論理的・存在論的必要をとき、時間地理学の方法論を重視した。すなわち、時間性は社会的形態の基本であるが、空間的共存（presence）や欠在（absence）の概念をとまなわないと意味をなさないからである。

そこで、地理学者としての筆者は、以下、欧米の地理学論文について展望し、時間地理学の側からギデンズの構造化理論をどのように評価をし、方法的に摂取・吸収しようとしたのかを明らかにすることとしたい。

なお、以下、ギデンズのように著名な社会学者の人名については、日本語表記をするが、その他の人物は原語表記をする。

また、この掲載誌の読者の大半が社会学者であり、時間地理学については、はじめてその存在を知る方も少なくないことが予想されることから、冒頭に時間地理学についての簡単な紹介と用語の定義を掲載しておくことにする。

従来からの地理学の方法論は具体的な地域・景観・環境、あるいは抽象的な交通・情報流動ネットワークの構造を対象とするものであった。いずれもその対象から人間は捨象されてきた。それは、歴史学において、歴史上の登場人物に大きな関心・注意が払われてきたのとは、すいぶんかけ離れている。地理学が人間不在であると批判されてきたのは、このような点においてであった。

そのことに対応して、個人の空間的行動を対象とする行動地理学が、新しく提起されてきた。空間的行動とは、諸個人が、住む・暮らす場所、働く場所、買い物に行く場所、旅行など外出する場所・経路を選択する行動である。人は、その場所の環境について、直接的・間接的にさまざまな情報や刺激を受けて、知覚・認知し、それをもとに行動するのである。その一連のプロセスを研究するのが行動地理学である。

行動地理学は行動心理学など、行動主義の影響を受けている。人々の刺激に対する反応には、一定の共通したパターンが認められると考えられる。特定の同じ刺激に対して、それぞれの個人はどのように反応するのだろうか。

また諸個人は異なる状況のもとで、ある同じ刺激に対して、いかに反応の違いを示すのだろうか。そこで、行動地理学の研究は環境の変化や社会の影響を重視することになる。このような行動地理学の研究には、消費者行動・空間認知・認知地図などの研究がある (Golledge and Stimson, 1987)。

そのなかの時間地理学は、スウェーデンの地理学者ヘーゲルシュトランド (Hägerstrand) によって提起されたものである。ただし、以下に詳述するように、時間地理学と構造化理論との関係を考えて、単に時間地理学を行動主義の応用とだけみなすことは難しくなると考えられる。

時間地理学とは、個人の社会的属性の違い、すなわち社会的地位・職業・年齢・性別・ライフスタイル (既婚者か独身か) によって、時間や空間の制約の受け方が違う、日常生活における空間移動の仕方、その時間配分の仕方が異なること明らかにする。具体的には、何時何分にはどこで何をしていたのかという個人の行動の記述からはじまり、個人の行動の時間的・空間的パターンの研究となる。

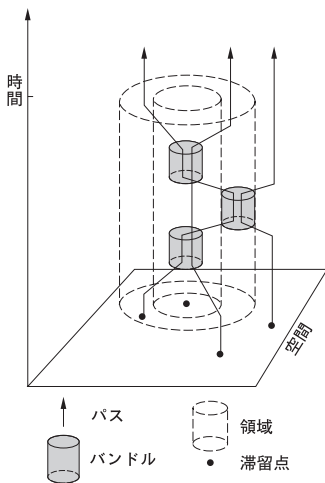
その時間収支の研究から詳しく見てみよう。人は時間的・空間的にさまざまな制約を受けている。まず睡眠・食事・着替え・洗顔・入浴など、生きていくために必要な時間が拘束されている。これを生きるための制約という。その他、人間は体を分割して、同時に二つ以上の場所に行くことはできない。過去や未来に行くこともできない。どんなに早い乗り物を使っても移動所要時間がかかる。これらを物理的制約という。さらに法律・制度・習慣などが、人々の行動を規制している。これは管理の制約と呼ばれる。

これらの制約のうち、最も重要なのがカップリングによる制約である。カップリングの制約とは、人がある人と同時に同じところにいることを指している。例えば、授業に出席するために、ある時刻に間に合うように大学の教室に行かなければならないのは学生や教員にとってカップリングの制約である。また、家族と共に過ごすために夕食の時刻までに帰宅しなければならないのもカップリングの制約の事例である。さらに、同じ授業の履修手続きをした

ために、お互いに面識の無い学生通しが、同じ時間に同じ教室で授業を受けなければいけないのもカップリングの制約である。

これらの制約をもとに、1日24時間の個人の時空間における行動を示したのが、「時間収支」を示す「ディオラマ」の図（第1図）である。個人の1日の行動を示しているのは、「パス（経路）」とよばれる矢印の線である。パスが上下まっすぐになっているところは、家庭・職場・学校など、ある時間帯そこに滞在して活動が行われた場所を示している。このような場所を「ステーション」という。またパスが斜めに描かれているところは、空間を移動中である時間帯を示している。

そして、ディオラマの図上で何人ものパスが同時に一箇所のステーションに集まり、カップリングの制約が生じているところを「バンドル」という。そして、一切、誰からもカップリングの制約を受けずにバンドルを形成することなく、個人が自分で自由に使える時間帯と、そのときに自由に移動できる空間の範囲をジオラマの頭上にひし形の図形で示したものを「プリズム」



第1図 時間収支の概念図（ディオラマ）

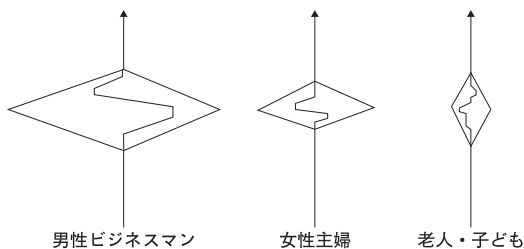
筆者作成

と呼ぶ。

これらのジオラマの図で問題としなければならないのは、諸個人の社会的属性の違いによるプリズムの大きさ、すなわち個人が誰からも制約を受けずに自由に使える時間の長さや自由に行動できる空間的範囲のひろがりの違いである。例えば、第2図の左端は、自由業や営業職のサラリーマンの場合を誇張して表現したもので、朝、家を出てから夕方に帰宅するまでに家族とのカップリングの制約を受けずに、自由に行動できる時間や空間の範囲が大きいことを示している。これに対して、第2図のまん中は家庭の主婦の場合であって、家事や育児の制約があるために、自宅から遠く出かけられないことを示している。さらに図の右端の、子ども・高齢者・体の不自由な人のケースでは、移動の制約がきわめて大きいため、プリズムは最も小さい。

このようなことを明らかにできるので、時間地理学は、ジェンダーの問題を鋭く指摘している。また公共交通機関の運行ルートや運行時刻の決定、特に移動の制約の大きい人々が利用することが予想される公共施設（保育所・老人福祉施設など）をどこに立地させるかといった問題の解決に応用することが可能である。

以上で、時間地理学の基本的な紹介を終わる。以下、第Ⅱ章では、時間地理学と構造化理論を考察する際の基礎となる地理学における「構造—主体論争」について触れる。第Ⅲ章では、時間地理学の方法論について、さらに詳



第2図 パスの可動範囲であるプリズムの大きさの違い

筆者作成

しく検討する。それを受けて第IV章では、ギデンズによる時間地理学への評価と批判について言及する。さらに第V章では、地理学者からみた構造化理論への評価と批判を展望し、時間地理学と構造化理論との関係を考察する際に、社会的再生産の概念が重要であることを指摘する。そして、最終章で、時間地理学と構造化理論の結合の意義、両者の共通性や相違点について、言及する。

II 地理学における構造－主体論争

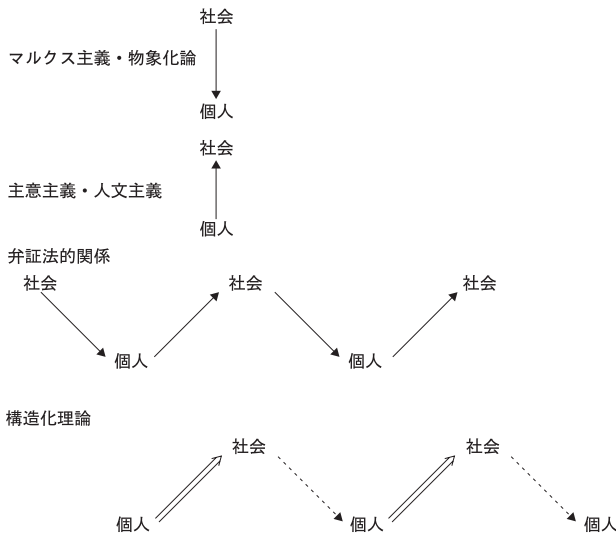
1950年代以降、欧米の地理学では、計量的手法のめざましい発達によって、論理実証主義的・理論的・演繹的・法則定立的研究がさかんになり、従来からの伝統的・機能的・個性記述的な地誌（地域叙述）の研究スタイルが相対的に凋落していった。

ところが、1970年代以降、欧米の人文地理学において、これらの論理実証主義的な研究動向に反発するオルタナティブな批判的な地理学や地誌（地域叙述）の方法が提起され、新たな社会理論との結合が試みられてきた。その主要な批判的地理学の流れは次の二つに大別できよう。一つは現象学・実存主義の影響を受けた人文主義地理学であり、もう一つはラディカリズム・構造主義の影響を受けて変容しつつあるマルクス主義地理学であった。

そのうちの前者は、人間主体の役割を重視し、後者は社会構造を重視する。そこで、地理学において、社会構造と人間主体の役割のうちのどちらを重視すべきなのかという、構造－主体論争が盛んに展開されることになった。

ところで、地理学において、人間主体と地域の社会構造との関係はどのようにとらえられてきたのだろうか。Gregory (1981) は、人間行動と社会構造との関係について、歴史的变化との関係から、次の4個のモデルを提起している（第3図参照）。

①物象化：デュルケームやネオ・マルクス主義者が典型例である。社会は独特な現実である。それは外的な存在であって、人間主体を制約する。よっ



第3図 さまざまな思想において個人と社会のどちらが主体性をもつか

(出所) Gregory (1981) : p.11の図をもとに筆者作成

て、社会が個人を規定する。

②主意主義：マックス・ウェーバーの社会理論が典型例である。社会は個人の意図的な活動によって構成されている。よって、個人が社会を規定している。

③弁証法的再生産：社会は個人を形成するが、その個人は継続的な弁証法的関係において社会を創造できる。すなわち社会は人の外部的存在であるが、人は意識して社会に一部分を専有することができる。よって、個人は社会に働きかけ、社会も個人に働きかける相互作用となる。

④構造化理論：ハーバマスやギデンズが典型例である。社会システムはそれを構成している諸実践の手段であり、結果である。この両者は、繰り返して分離され、再結合される。要するに、個人は社会に働きかけ、社会もそれに応じて個人に働きかける相互作用の繰り返しであるが、個人が社会に働き

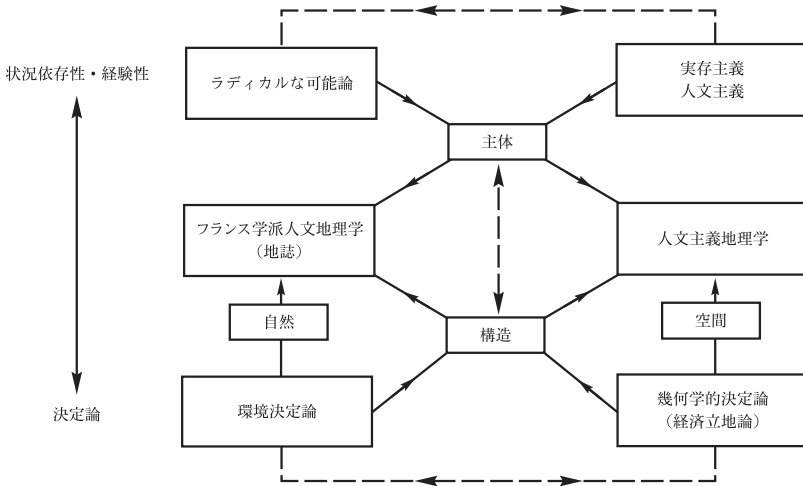
かける力の方が強い。

人文主義地理学の方法論として、Ley (1977) は、次のように指摘している。現代の人文地理学の欠陥は、社会的形態と社会的プロセスの違いを区別できていないことにある。それは、事実と価値、客観性と主観性、自然科学と社会科学との違いである。それゆえ、地理学者は客観性に加えて、主観的世界を対象とすべきである。そのため、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ以来のフランス地理学の地誌の伝統、パークのシカゴ学派都市社会学、行動地理学の方法論を融合するとともに、人々の行動や意識の基盤にある日常の当然視される世界を精査すべきであると主張した。

このような Ley の考えを受けた Gregory (1981) は、人文主義地理学の基本的問題は、諸個人の行動と、社会的構造からくる制約との関係をどのように説明するかという問題であるとみなした。主体の空間的な行動や言語活動は、多様な状況依存性（経験性）から構成される制約を通して、実際の生活における状況依存性を構築しているのである。すなわち、Gregory は人文主義とマルクス主義の橋渡しをしようとした。このようにして、ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ以来の地誌の伝統をゆたかにすることができる。それは地理学における不毛な環境決定論・可能論の論争を復活させることではない。むしろ、それらを日常生活の物的基盤を解説するなかに再構築することによって、「生活様式」の概念と「生産様式」の概念を結合させようと試みている（第4図参照）。

一方、Smith (1984) は、人文主義地理学方法論が依拠すべきものとして、パークのシカゴ学派都市社会学における人間生態学ではなく、むしろ道徳的合意にもとづく社会心理学をあげる。シカゴ学派におけるプラグマティズムや象徴的相互作用論を重視し、主体と構造の対立点を仲介するのは、経験に根ざした道徳的価値観であると述べている。

すなわち、これらの議論を通して明らかになってきたことは、一方では資本主義の一般法則に包み込まれて人間行動が決定されるというマルクス構造



第4図 地理学における構造－主体関係

Gregory(1981):p.5の図をもとに筆者作成

主義的アプローチの極端な決定論と、諸個人の相互作用を通して、場所の特徴を明らかにしようとする人文主義地理学の極端な主意主義との違いが鮮明になったということである。これらの対立を止揚して、地理学における新たな地域叙述（地誌）の方法論が求められるようになった。

Thrift (1983) は、このような状況のなかで、マルクス主義社会理論と構造化理論をもとに個別事象に関する一般的知識を生み出すことで、この相違点を克服しようとしている。人間主体は時間と空間に位置づけられる行為の継続的な流れとして、文脈上（コンテクスト的）なものとして理解されなければならない。しかし、家庭・学校・職場など、諸制度から生じる活動の場所は構造を反映している。人間行動の相互作用に関する細分化した理論はコンテクスト的な性格をもって、時間と空間のなかに位置づけられている。それゆえ、新しい地誌を再構築しなければならない。それは、従来の伝統的な

手法のもとに基礎を置くが、理論的で解放的な目的を持つと主張する。

まず、新しく再構築された地誌は、生産組織・階級形成・性別役割分業・国家の地方出先機関の配置や地方政府の組織など、社会構造に従った伝統的・構成的な地域的状况の説明から始められる。それにもとづき、空間的コンテクストの上に相互浸透をし、変化をよびおこす社会行動に関するコンテクスト的な理論が発展する。

このような相互作用が生じる地域を構成するのが、ギデンズのことばによる「ロカール」である。ロカールとは、すなわち活動を制約したり、促進しうるような地域単位である。一定のロカールを通して、労働生産や、家庭における再生産が行われる。ロカールの修正が、時間と空間における個人の生涯のパス（経路）に影響し、相互作用の可能性を制約し、主要な社会的闘争の場所を提供する。要するに、ローカルが日常の定例的活動の構造や、主要な社会化のプロセスを形成するのである。新しい地誌にとって、地域は社会活動の基礎となる。

Thrift にとっては、いかに社会性やコミュニティや場所についての理解が、相互理解やコミュニケーションを促進または、抑制しているのか、すなわち個人のパーソナリティや知識の利用可能性とその浸透についての歴史的・地理的研究が重要であると主張している。

Ⅲ 時間地理学の方法論

このような新しい地誌の方法論として、Thrift (1983) は Hägerstrand によってはじめられた時間地理学をあげている。この章では、地理学者による時間地理学の方法論について展望することとしたい。

Hägerstrand (1970) は、人間活動における時間－空間の制約を重視した。地域科学や計量地理学における大規模な集計的データの統計的・数量的な取り扱いを批判し、個人の行動というミクロ・レベルの要因を重視することを主張した。時間は、社会経済システムが機能するために、人々や諸事象

が並存するときには決定的な重要性をもつ。

Hägerstrand (1970) は、時間地理学において三つの制約をあげている。第一に能力の制約である。睡眠や食事など生きるための時間的制約である。時空間における個人の行動を制約する距離条件もここに含まれる。第二はカップリングの制約である。個人が他の人々と出会い、かつその場所における何らかの器材・材料・施設を利用し、イベントや活動に参加するための時間的余裕が、その場所への滞在や移動の時間も含めて、どの程度長く保つことができるかという制約である。第三は管理の制約 (authority constraints) である。管理機構の階層性などにともない、個人や団体の活動が管理される場合である。これは権力の行使をともなっている。たとえば、就業時間以外における職場への入構制限や、指定者以外の立入禁止の措置などがとられることなどである。Hägerstrand にとっては、社会は制度化された権力と権威のシステムからなり、それらがシステムに参与してくる諸個人について特に考慮することなく、慣習的に長期的な、時間-空間における制約を形成するのである。

Thrift and Pred (1981) は、時間地理学とイデオロギーとの関係について、次のように記している。継続的な歴史的プロセスは、先行する歴史的対象の社会的・物理的構造と相互作用をする。それゆえ、両者は変化し、変化されつつある。そのようなプロセスはパス (経路) やプロジェクトの弁証法として説明しやすい。古い制約の存続可能性が除去されると、新しい、しばしば予見できなかった制約や可能性が生じることになる。資本の循環についてみても、順に産業資本・商業資本・金融資本・象徴的な文化資本へと変化している。予め蓄積されてきたところのパスの経験やプロジェクトへの参加と、人々の生活のチャンスとの間には弁証法的な関係が予想できる。すなわち時間地理学の研究によって、個人の行動や経験と、社会の作用や社会変化との間の相互作用についての弁証法的な研究が可能となる。構造的な諸力は社会を安定化させる一方で、社会的実践の手段であり、結果でもある。ある

いは、それらは制度化されたプロジェクトに参加するために活動のバンドルに出入りするなかでの諸個人のパスの繰り返される経路となる。

すなわちイデオロギーは時間と空間を構造として編成し、時間—空間におけるパスの拡がりや。プロジェクトの実行を規定している。一つのプロジェクトへの参加が、他のタイプのプロジェクトにおける参加調整や変化をもたらす。同時に場所に対する時間地理学的制約は、身体的・精神的経験と目的との間の弁証法的相互作用なのである。

Pred (1977) は、時間地理学を、諸個人や集団が並存するプロセスにおける「振り付け」(choreography) であると主張している。

時間地理学は、人と自然環境との間の、あるいは人と人為的なものとの間の必然的な関係を特定することができる。それゆえ、人間生態学と生物生態学との間の断絶をおおい、つなぐものである。特に Hägerstrand は、このような枠組みとして、社会—技術的生態学を提唱している。この視点からは、空間と時間は限定された扶養能力をもつ資源としてみなされており、技術革新 (innovation) は既存の扶養能力にもとづいた空間—時間利用の特色を再構成する「侵入」であるとみなされている。

また、時間地理学は構成的アプローチというよりは、人間の活動や経験に関するコンテクスト的アプローチを発展させたものである。地理学者によって実践された構成的アプローチは、一定の現象の組合せやシステムの全体をまず総合化してとらえた後に、構成部分の階層性にもとづいて分解し、再度、諸部分が全体を形成するためにいかに統合すべきかを明らかにしてきた手法である。これに対して、コンテクスト的アプローチは、どのような種類の状況が、包含される事象や観察の単位となる個人にみいだされるのか、また異なった状況やコンテクストにおいて、それらの事象や個人の性格や行動がどのようなものであるかを明らかにし、総合するものである。このようなコンテクスト的综合が、構造とプロセスとの関係に中心をすえるものとなる。

さらに、Pred (1977) は次のように指摘している。時間地理学における

構造とプロセス指向は、景観の進化を、類似のあるいは異なる景観要素を指向する社会階層のすみわけのプロセスにともなう同時発生的で中断することのない事象としてとらえることを可能にした。その方法によって、Hägerstrand は新しい地誌と景観進化の学派を形成した。そこでは、観察の対象として選択された一定の地域における景観進化は人文・自然・技術的要素からなる諸要素の相互依存システムとしてみなされる。そこでは並存するプロセスや領域内における時間的・空間的共存に深い洞察が行われる。そして、諸個人と地域社会との間の相互作用の検証には、全体としての地域社会が、時間地理学的な日常的な定例的なルーチンに根ざしているのと同時に、観念・理想・象徴・諸制度・自然のリズム（季節的な生物的なリズム）にもとづいていることを理解する必要がある。

このような時間地理学の応用例として、都市計画・住宅政策・就業機会の提供・公共福祉施設の配置・公共交通機関の整備・営業活動の展開とオフィス立地の問題があげられる。特に Hägerstrand が参加した研究として、スウェーデンの将来交通量を、日常生活における雇用機会と教育活動への参加の観点から分析している。そこでは労働集約的産業から資本集約的な産業への転換、労働時間の減少、教育機会の拡大をもとにして、将来交通量の推計が試みられている (Ellegård *et al.*, 1977)。

IV ギデンズからみた時間地理学

以上の時間地理学の方法論に対して、社会学者のギデンズはどのように評価をしたのだろうか。また時間地理学と構造化理論との関係はどのようなものだろうか。この章では、以下全て Giddens (1985) : ‘*Time, Space and Regionalisation*’ の論文をもとに展望することにした。

ギデンズは、従来の社会学者が社会システムが時間－空間において構成される様式を構築することに失敗してきたと批判する。それが、ギデンズが構造化理論を構築した理由である。それは社会科学のなかの一部分の特定領

域ではなく、社会理論の核心にあり、社会科学における経験的事例研究を行うのにきわめて重要となると主張する。

一方、ギデンズは Hägerstrand の時間地理学を次のように総括する。時間地理学は日常生活の定例化（ルーチン化）した特徴を出発点とする。それらは順に、人間の身体の不可分性、モビリティやコミュニケーションの手段、生涯のライフ・サイクルをともなったパス（経路）に関係する。それゆえ、個人の存在は伝記風に、目的や意思をもったプロジェクトの遂行と考えられる。同時に Hägerstrand は、人間の活動への制約は、身体や物理的コンテクストによってあたえられる。そのような制約は、行動が時間－空間の枠組みを越えることを制限する境界となる。それらの制約は、①人間の身体の不可分性、②人間主体の生涯の有限性、③人的存在が一度に一つの仕事より多くのことに参加しうる能力には限界があること（同時にすべての仕事は持続性をもっている）、④空間における移動は、時間における移動（経過）をともなうという事実と、⑤時間－空間における収容能力には限界があることである。このような制約のもとで、主体が描く軌跡は、領域的な空間と時間のもとで、共存する存在に従うという圧力や機会を収容していかなければならないのである。

時間－空間の収斂の概念は、異なる地点（立地）を移動するのに要する時間と距離の短縮である。それは日常のプリズムの外側の境界の拡大によって示される。

さらに、時間－空間の領域における社会的パターンの相互作用の本質は、能力の制約とカップリングの制約によって限定されている。それらは生態学的な制約であると Carlstein はみなしている。それは3つの収容能力からなる。①居住している空間－時間の枠組みにおける自然の素材、有機体（生物）、人間の個体群の収容能力、②住民（個体群）の時間収支における時間を消費する活動の収容能力と、③個体群システムにおけるいろいろな規模、数、および持続性をバンドルに収容する能力である。それらは諸個人の非可分性と

継続する諸個人への制約のもとに集団を形成するのである。

時間地理学の構造化理論への関心は明らかである。時間地理学は、日常生活の定例的活動を形成する下部構造となる制約に関心を持つ。構造化理論も社会的行為を構成するために、諸個人がお互いに共存する状況において、日常活動の意義を強調する。時間地理学も社会システムの全体組織上での通常の人々の通常の日常生活を重視する。

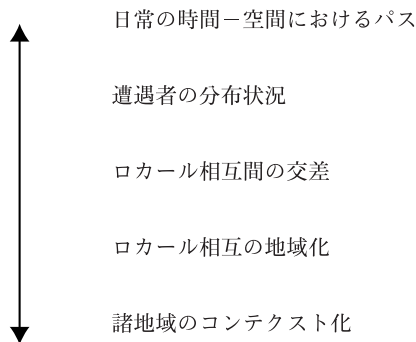
しかし、時間地理学の欠陥は次のとおりである。第1に、人間主体についての余りにナイーブで早急な概念化である。人的存在の身体性が強調されすぎていて、主体は、プロジェクトを遂行するための活動に従事する合目的な存在とみなされる。しかし、プロジェクトについての本質や起源は説明されないまま残されている。第2に、Hägerstrandの分析は行動と構造の二元論を超克していない。完全に日常化された形態においても、すべての人間活動における形成的な役割が軽視されている。第3に、身体の不可分性や時間-空間の移動における制約は完全に保証されていない。全てのタイプの制約は、また可能性にもなりうる。カップリングの制約を稀少資源の配分とみなすことは、史的唯物論とも結びつく。Hägerstrandの考えによれば、媒介する空間を通しての身体という稀少資源の配分は、あらゆる社会における社会制度の組織化に決定的な役割を果たしている。しかし現代においては、このような資源の効率的な利用も可能である。第4に、時間地理学では権力に関する議論が十分に発展していない。管理の（権威による）制約において、権力は他者の手によって生じる受動的なものとしてしか捉えられていない。

さらにHägerstrandの「場所 (place)」の概念は、時間-空間の組織を分析し、人間の社会的行為を研究する際に用いられる。しかし、社会理論における一時的な滞在を示すものとして場所を用いている。しかし社会理論において、場所ということばを空間における一点として用いることはできない。それは、現在の連続として、時間の一点を語るができないのと同じである。現存と欠在の相互依存は、時間性と同様に空間性の観点から解明されな

なければならない。そこで、ギデنزらは構造化理論において、社会システム統合の観点から、ロカールの概念を提案するのである。

ロカールは、空間の使用について、コンテクスト性をもった相互作用の状況である。それを、物理的特性の見地、すなわち物質的世界や人工物の特徴からみなすことも可能であるが、それだけでは誤りである。また人間行動の描写という行動主義の立場だけでみることも十分ではない。ロカールは、内的に地域化された概念である。場所ではなくロカールの状況こそが、主体者が空間と時間を通して、交差し、遭遇する長期的な方法なのである。異なった諸個人の日常的活動が交差し、遭遇することによって社会的結合が持続するのである。すなわち、日常の時空間におけるパスにおける遭遇者との交差がロカールのコンテクスト性を形成する。このようにして形成されたロカール相互の交差がロカールの地域化を招き、地域のコンテクスト性を形成するのである（第5図参照）。

それゆえ、地域化（regionalization）は空間における単なる局地化（localization）と見なすべきではない。むしろ日常的な社会的実践に関しての時空間の地帯区分（zoning）として言及すべきものである。地域化は



第5図 ロカールから地域化へ、コンテクスト性の発現

Giddens(1985):p.283の図をもとに筆者作成

範囲や規模においてさまざまな地帯を合体する。ここで言及するすべての地域は、空間と同様に時間の展開を含んでいる。地理学における地域は物理的障壁によって範囲が定められるが、構造化理論では、時間－空間を越えての社会行為の構造化の概念を含意しているのである。このようにして、階級関係や他の社会的基準をもとに、強い地域分化の作用が生じる。これは、英国北部と南部の違いのような事例である。このような地域化によって、ローカルの時間－空間の組織化が行われる様式が、社会システムのなかに順序づけられる。たとえば、住居は家族関係の場であり、生産の場でもあった。しかし、現代資本主義の発展によって、家庭と職場は分離されてきた。それは生産システムや現代社会の制度的特徴にも影響をあたえている。

このような地域化の動向に関連して、ローカルの特定の形態に関連した現存－利用可能性の概念がある。この概念は共存（copresence）の付加物である。およそ百年前には、コミュニケーションはお互いに近接していないと成り立たなかった。そして、主体の身体性が、日常活動の持続性に関連して、モビリティに制限を加えていた。しかし、交通手段の機械化が劇的な時間－空間の収斂をもたらした。さらに電気通信の発達によって、コミュニケーションのメディアと移動交通のメディアとの分離が生じている。

V 地理学者からみた構造化理論

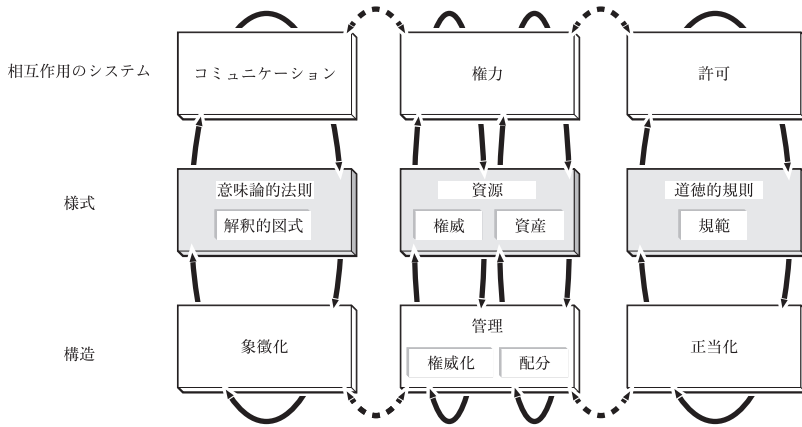
すでに第Ⅱ章でみたように、マルクス構造主義は、人間的存在について、明確に抽象的・全体的・決定論的概念であり、諸個人の行動や意識の自立性の余地が殆どのこされていないと批判されてきた。その反省として、時間と空間を合体させる構造化のプロセスが提起されてきた。ギデンズの構造化理論は、構造と主体の間の橋渡しをする概念である。個人の主観や社会の客観性ばかりを強調するのではなく、社会科学の領域が空間と時間を通しての社会実践から構成されていること主張するのである。この章では、さらに地理学者が、時間地理学の方法論的展開をふまえて、構造化理論をどのように評

値し、批判したのかについて展望することにしたい。

Peet (1998)によれば、ギデンズにとって、社会实践の再帰的秩序は、人間の知識性の再帰的な形態に関連している。再帰性は単に自意識としてではなく、行動からの学習や監視を通しての、すなわち社会生活の流れについての精神的なモニタリングとして理解される。人は目的をもった存在である。人間の行動や認識はこのような継続した流れの持続として考えられる。再帰的な監視、その合理化、行動の動機は一連のプロセスに埋め込まれている。行為者は社会的・空間的コンテクストにおいて、行動の流れを監視している。そしてそれを合理化することによって、行動基盤についての継続した理論への理解を持続させることができる。

しかし、このような意図的な行動の流れが、意図しない結果を招くことがある。それゆえギデンズは、行為者が社会的な必然性を認識して行動するが、意図しない結果を招いた影響として、時間-空間のコンテクストにおいて調整されたものから、その意図しない結果が累積してきたプロセスを分析しなければならないと考えている。

ギデンズの構造化理論の中核は、「構造」・「システム」・「構造の二重性」の概念である。構造は現存と欠在の交差と考えられ、ルールと資源の組合せとして分析される。ルールは社会的相互作用における方法論的手続きを含意する。それには、一方では意味の構成に関連する「象徴化(意味)」と、他方では社会行為の監視にあたる「規制化(監視)」、そして「管理(権力の行使)」がある。そして、Peet (1998, p.157)によれば、第6図に示すように、ギデンズの理論におけるシステムと構造の二重性については、三つの構造化の「様式性」によって結合されている。つまり、伝統的な主体と構造の間の二元論を置き換えるために、ギデンズは、主体を欠いた構造の部分から、人間主観の状況的な活動をふくむ社会システムを区分することで、システムと構造の二重性を提起したのである。それらは、知覚され、能力をともなった主観性が、規則や資源の制度化によって、たばねられていることを、第6図



第6図 ギデンズの存在論における構造と相互作用システムの二重性

Peet(1998):p.157の図をもとに筆者作成

は示している。

そして、Thrift (1984) は、ギデンズの構造化理論を次のように評価している。ギデンズは史的唯物論を批判した。資本主義においては生産様式や階級闘争がすべてを決定するのであろうか。人間の生涯は生産のなかで完結するのだろうか。ギデンズは、マルクスがあらゆる社会のタイプで多様な資本主義の展開があることを認めていなかったと批判している。

ギデンズの構造化理論における時間-空間の距離化は、部族社会から資本主義社会への発展過程において、急速に増加した。当初は、「現存-利用可能性 (presence-availability)」によって、コミュニケーションの相互作用は現前して距離が近接していないと行われなかったが、現在は遠隔化しても行われている。これは単に時間-空間の収斂のためだけではない。さらに時間-空間の物象化 (commodification) の結果でもある。資本主義社会のもとでは、時空間の再編が行われ、諸活動は拡大した国家の監視のもとに置かれる。国家は単なる空間の容器ではない。そして監視者の役割としての都市

の機能は権力の主要な容器としての国民国家にとってかわられたのであると説明している。

さらに、Carlstein (1981) は、構造化理論と地理学の関係について、次のように指摘している。構造化理論は個人の行動と社会構造との関係を扱うものである。ギデنزは伝統的な機能主義や構造主義における時間性の欠如を批判した。いかにして社会的諸形態や諸制度の集合は、生産され、再生産されているのかを考察する際に、時間－空間の枠組みの欠如がいかに有害なものとなるかを指摘した。構造は、次の世代の行動を可能にするようなルールと資源によって構成されている。構造は人間主体によって存続され、修正されるものである。ギデنزは時間－空間の枠組みの中心として、象徴化(意味・観念)、支配(資源の活用)、規制(許可・基準・権利・義務・報酬)をあげている。このギデنزの理論はこの時間－空間の枠組みと時間地理学との関連の観点から評価される。

そこで、時間と空間を結合するのに調停する役割を果たすのは、社会的再生産である。時間と空間の結合、すなわち時間地理学で認識された時間－空間における軌跡(パス)への制約は、社会システムにおける行為者の現存－利用可能性によって理解される。すべての社会的相互作用には、時間－空間の格差、すなわち距離を通して、社会的交換を行う交通の役割が存在する。高度に現存－利用可能性に依存している前近代の社会では、直接対面してのコミュニケーションが重要となるが、やがて文字や他のコミュニケーションの手段(電話・テレビ・機械化された交通手段)が時間－空間におけるより大きな距離を克服するようになり、時間－空間の距離化が行われる。そこで、時間地理学の言語は、このような構造化理論で示された社会システムにおける媒介手段の複雑さを取り扱うのに効率的な言語なのである。

このような媒介や資源の制約は一定の生物的・物理的現実にもとづいている。構造は、多様な人間の創造力の余地を残すものの、社会－環境システムにおける多様性や状況依存性(経験性)にもとづいている。資源の配分という管

理（支配）の領域を通して、時間における再生産は、制約条件を通して、これらの媒介手段を一括する。

再生産の現実的理論として、進化生態学のアナロジーをあげることができる。ダーウィンはいかに自然界における生産（捕食・略奪）と再生産が生存闘争に結びついているのかを明らかにした。生存闘争は限られた生命空間や自然の経済の構造的特性に結合する。自然選択説が語られるのはこの文脈においてである。いかに現代の生態学がエネルギー収支とともに、時間や空間の収支について語るができるかどうかは非常に興味深いことである。

また、Pred (1983) は構造化理論と時間地理学との関係について、次のように議論している。個人と社会、実践と構造、主体と構造、社会化と社会的再生産、これらの対照的なカテゴリーは、絶え間ない「構造化」のプロセスのなかで、弁証法的に再生産され、お互いに変形されるものとして描かれている。社会的再生産においては、諸制度の存続と修正、実践と構造の弁証法的展開がなされる。時間地理学と構造化理論の統合は、社会を構成している諸制度が、毎日の長期的な生産・消費や他のプロジェクトの実践と分離して存在しえないという認識から出発する。詳細な状況と構造化の物的な継続性をともなって、社会的再生産と個人の社会化は、特定の時間的・空間的立地における個人のパスと制度的計画の交差として説明できるのである。

時間地理学と構造化理論の統合は、社会理論や個別の社会諸科学にとって、大きな概念的カテゴリーやテーマの再解釈をもたらすことになる。実践と構造の弁証法的関係と、時間-空間における流動の具体的、地域的、ミクロ・レベルでの相互作用と、マクロ的なプロセスと構造などといった時間地理学と構造化理論の総合によって追究される可能性は、「場所の感覚」の考慮によって示されうる。場所の感覚は、さまざまな個人の経験や精神的な活動と結びついている。

その「場所の感覚」は新しい人文主義地理学を生み出す。すなわち、各々の個人は、意味や意図、感じられた価値観の中心であり、情緒的・感傷的な

愛着, すなわち感じられた意味のロカルテイとして理解される。空間の特徴的な意味は, 居住や住民の地域活動や日常生活を通して, 親しみや記憶の蓄積を通して, 場所を動的に変化させるのである。そして, 個人や地域共同体のアイデンティティや安心感・関心といった帰属意識が形成されるのである。

すなわち, 過去に経験された社会的相互作用や社会化は家族・学校・職場や他の諸制度といった具体的状況によって供給される。個人の伝記は, 意識の成長や社会化とともに, 日常生活の実践を通して再解釈される。またそのような実践によって, 社会的・経済的構造の特性が表現され, 再生産されるのである。「場所の感覚」は, 時間地理学と構造化理論の統合されたプリズムとして更新して理解しなければならない。それは, 歴史的に特定な状況における個人と社会, 実践と構造の継続した弁証法的関係の副産物でもある。

さらに Pred (1981) は, 時間地理学・構造化理論と社会的再生産との関係について, 次のように指摘している。時間地理学は人文地理学と社会理論を統合する試みであり, 社会と個人, 諸個人と集団, 主観と客観との間の弁証法的研究であり, 私達の生活の日常経験を通じた世界への考察である。Hägerstrand をはじめとする Lund 学派の人々は, 時間と空間における行動と伝記と, アクセシビリティへの制約を記述する効率的な方法を生み出しただけでなく, むしろ個人と社会を弁証法的に系統化するパスとプロジェクトの概念からなる, 高度にフレキシブルな言語と進化しつつある哲学的視点を提供したことにある。

時間地理学は社会的再生産の理論を通して, 構造化理論に結びつき, 人文地理学と社会理論との結合を可能にする。社会における構造は, 個人・集団・制度の各相互間に形成される。それゆえ社会的再生産は, 一定の地域において毎日のパフォーマンスが継続するプロセスであるとして定義される。この継続する社会構造と日常的実践の間の弁証法的相互作用が, 「構造化」として言及される。構造化が時間-空間における相互作用に関係しているのであ

る。すなわち、社会的再生産、個人の社会化と構造化の細部は、特定の時間的、空間的立地において、諸個人のパスと特定の制度的プロジェクトの交差として記述される。

このような時間地理学にもとづいた弁証法的関係として、外的（身体的活動）－内的（精神的活動・意図）関係の弁証法と、生涯のパス（生物学的）－日常的パス（毎日）関係の弁証法があげられている。

そして Pred (1984) は、時間地理学と構造化理論を統合し、「場所」にもとづく地誌の方法論的基礎について、以下のように指摘している。

場所は、時間と空間において、社会の再生産や変化から分離できないし、そのプロセスにおける空間と自然の占有と変化をともなっている。そのようなものとして、場所は行動や社会的相互作用のための景観・ロカール・状況としてだけでなく、また物理的状況の創造や利用を通して、歴史における特定のコンテキストを形成することに貢献する。場所の理論は歴史的、状況依存的（経験的）なプロセスとして、制度的・個人的な実践と構造的な特徴を強調する。構造化理論と時間地理学を統合することは、ヴェイダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ以来の地誌や生活様式の問題を復活させることになる。

さらに Thrift (1985) は、空間は社会集団が収容されるところの空虚な容器ではなく、相互作用を構築する場であるという観点から、時間地理学と構造化理論との関係について、次のように記している。

ギデンズは社会理論がよりコンテキスト的であるべきだと主張している。コンテキスト性とは、非常に単純化して言えば、すべての人間の相互作用は時間と空間の流れのなかに位置づけられるということである。それゆえ、時間－空間関係は、社会理論の中心に合体されなければならないのである。そのコンテキスト性について考える際に、次の二つの要因が重要となる。

第一は、行動のための特定の資源が特定の場所に現存しているか、欠如しているかということが重要な問題となる。特定資源の現存と欠如の分布が、時間と空間を通して変化する。またこれらの資源の現存と欠如の特定の組み

合わせを特定の場所（ロカール）に見出すことができるのである。それが、ロカールにおいて、ある行動が成功し、他の行動が失敗することを導くのである。すべての行動は空間と時間のなかに位置づけられている。それらの直接の結果は、何が現存し、何が欠如しているのかにもとづき、それによって諸事象が生じることが促進されたり、妨害されたりしているのである。このことが、人間行動の構成と社会構造の再生産にとって重要なのである。

第二は、コンテキストの理解には、特定の時間と特定の立地において、特有の方法で相互作用をするコンテキストの多様なモザイクとして、社会を理解することが必要なのである。

そして、社会システムは多かれ、少なかれ「距離化」されている。それらは規則や資源・再生産の現存や欠如、交際の可能性についての拡大や縮小である。つまり、歴史的に社会システムは、対面的接触にともなう直接的な社会統合から、時間－空間を媒介する新しい交通・通信技術の発達によって、対面的な接触を必要としないシステム統合へと向かっているのである。人類史においてはじめて、現代世界システムは、同一空間における存在の欠如が、システムの統合に支障しない段階にまで至ったのである。

一方、地理学者の側から構造化理論に対して批判を述べた論文も認められる。

Gregson (1986) は、まず時間地理学と構造化理論との収斂性について、次のように述べている。時間地理学は計量地理学を批判し、その空間分析に代替的な世界観を示すものである。ディオラマは社会生活における物理的結合やコンテキストを示す。パスやプロジェクトは、時間や空間におけるこれらの複雑な織り込みを図示するものである。ギデンズも社会生活を時間－空間の枠組みにおける主体－構造関係にもとづいている。

しかし、ギデンズの分析はコンテキスト的観点だけではなく、構成的分析の要素も強い。一方、Hägerstrandの研究は、構成的分析に対置されるコンテキスト的分析を重視し、特定の社会－居住地における微視的な研究を重

視している。Hägerstrandの当初の研究は物理的・客観的制約を重視していたが、後になると人文主義地理学の影響を受けて、個人にとっての象徴・観念・情緒・感覚といった内的世界を重視する研究へと変化している。

ギデンズの研究は理論的であり、経験的事例的研究を欠いている。資本主義社会における時間的・空間的要素のもつ意味を軽視しているのではないか。とりわけ既存の空間的かつ時間的な社会組織が再生産され、変化し、再構成されるプロセスを重視しなければならないと主張する。

さらに、Gregson (1987) は、ギデンズの研究の方法論について、①人類学的・民族誌的研究・②日常生活に示される個人の能力を重視する視点と、③社会生活の時間－空間的構築、すなわち社会の時間－空間構造が再生産されるプロセスが重視されている。これらの方法論を通して、ギデンズは構造主義者の視点をも導入している。たとえば、見識ある個人＋意図しない結果＋構造の二重性（主体－構造）＋…といった方法である。

しかし、多くの社会諸科学に共通する理論的概念（賃労働関係・労働過程・産業構造の転換・ジェンダーなど）の視点がさらに必要となる。つまり、構造化理論は、経験的研究において、諸事象が特定の時期や場所における状況依存性（経験性）にもとづいて生起することについては、高度に抽象的な議論である。ギデンズにおいては、抽象的な概念について、理論的研究と経験的研究が分離されていると批判する。

そして、Storper (1985) は、次のようにギデンズの構造化理論を批判している。ギデンズは、機能主義や、構造の具体化・一定の方向に定まった進化といったにもとづいた説明を拒絶している。時間－空間の枠組みにおける相互作用の実践に関する構造化理論は人文地理学にとって重要である。しかし、ギデンズの理論は、構造化の複雑さと戦略や意図の多様性を無視している。これらのことは、人間主体にとって、日常の定例的な実践の知識だけからでは形成できない。結果として、ギデンズ自身の構造主義への批判にそぐわない、弱体な行動理論になってしまった。

また、歴史的変化は、時間－空間の最前線におけるエピソードの交差として、記述されている。しかし、このような交差がどのような状況のもとで生じるのか、また我々が時間－空間の距離化のカテゴリーを通して、構造・実践・変化をどのように知覚するのかについては明らかにされていない。

時間－空間の枠組みにおいて現代社会生活を再解釈する試みを、単に日常的・定例的ルーチンや実践的知識と意図しない結果の組み合わせの狭い領域だけに還元してはならない。むしろ、戦略的行動・物的資源の持続性や、論証的な制度的プロセスこそが、これからの人文地理学や他の社会科学において、時間－空間の距離化の役割について、経験的研究を行うのに重要な概念となると主張している。

VI 結び

地理学と、社会学における構造化理論が結びつくことで、次のような利点が考えられる。第1は、場所の視角をとることで、たとえば階級といった抽象的カテゴリーが、日常生活の文脈で分析することができるようになる。第2は、構造化が生じる文脈として、場所を取り上げることで、空間的・時間的な法則の普遍化を避けることができる。すなわち、日常生活における社会関係の構造化には、さまざまな場所の間での類似の要素、例えば階級、中央政府と地方政府との関係など、社会的再生産のプロセスがあるが、それらはそれぞれの場所で多くの違った結果を生じさせている。第3に、各々の場所や地域において、違った速度で異なるように変化するのであるから、歴史の段階を機械的に区分することを避けることができる。第4に、文化的多様性を反映した局地的な差異を強調することにより、経済決定論にもとづく議論に反論することができる。

ギデンズの構造化理論における時間と空間の概念は次のようにまとめることができる。第1に、自由な意思の下における人間の社会的生活や社会的実践は時間と空間の枠組みのなかで生起している。第2に、このような時空間

のなかでルーチン化、日常定例化された行動や相互作用が、生活や行動のコンテキストを形成し、このようなコンテキストを形成する時空間の部分集合をロカールと呼ぶ。第3に、ロカールは、各個人において内面化され、地域化される。このようにして形成された地域こそが、さまざまな社会的関係や相互作用のコンテキストを再生産する。第4に、こうした地域や地域化は、社会の全体の構造の予め与えられた一部分ではなく、人間の日常生活のなかで形成され、構成されるものである。すなわちロカールとは、人々によって日常的に体験され意味づけられている時空間の一部ということになる。

ロカールは社会的諸関係が日常的に構成され、再生産される場である。それは家屋内部や街路から、国民国家の範囲までおよぶ。ロカールは社会構造と人間関係が出会う場所であり、社会システムを構造化する結節点である。毎日の社会的相互作用の日常定例化（ルーチン化）されたパターンと結びついているロカールは、社会システム統合のための重要な概念である。ロカールにおいては、権力や支配の諸関係が再生産され、情報の蓄積や監視が行われる。すなわち、行為者はロカールにおいて、他の行為者と交差することで、社会システムの統合を日常的に再生産するのである。私達は、その生涯における特定のロカールにおいて、社会的諸関係の反復する組合せのパターンを示すのである。

このように、構造化理論は、特定の時間（期間）と空間（場所）における人間主体と社会構造との関連の解明がテーマである。時間と空間における人間主体と社会構造の相互作用を強調する。そこで、構造化理論と時間地理学の共通性は、両者ともに、日常生活の決まりきった日課を形成する制約条件に大きな関心を持っている。また日常生活における共存・現前（同時に同じ場所にいること；カップリングの制約）ということが、行動の実践において重視される。すなわち、現前する、同時に同じ場所にいることがコミュニケーションや社会システム統合の基本と考えられている。構造化理論と時間地理学の違いについては、構造化理論の方が時間や空間における権力や支配の問

題により関心を持っているところが異なる点である。

時間地理学や構造化理論が提起されてから、すでに30年以上が経過した。その間には、携帯電話の実用化など、個人的な、パーソナルな通信・交通手段が普及し、個人レベルでの時間的・空間的制約が大きく解消し、時間－空間の距離化がさらに進展した。国際的・即時的な情報処理能力が高度になり、政治的・経済的権力における時間や空間の持つ意義が大きく変化しつつある。現在、再び改めて、時空間における社会構造の再生産と人間主体との関係について、再検討することが必要であろう。

なお、本論文の出稿を終えるにあたり、改めて筆者として、その不備な点、反省点に気がついた。時間地理学のヘーゲルストランドや構造化理論のギデンズの原典にあたり、直接その核心に迫った文献渉猟がきわめて乏しい。つまり、試合に参加せずに外野席の意見を拾い集めているようなものである。日本の地理学界の先学による時間地理学に関するすぐれた業績が触れられていない。現在までの内外における具体的な時間地理学の応用事例やその成果に言及していない。以上の反省点が痛切に感じられる。

社会学の門外漢である一地理学者が、ようやくさまざまな手がかりをもとに、ギデンズを読み解く玄関口にたどり着けたというのが、今の実感である。ただでさえ、社会学と地理学間の交流がきわめて少ない現状のなかで、本論文が社会学者に、日本の地理学者の社会学の理解水準はこのようなものかというような誤解をあたえることがないようにお詫び申し上げたい。本来はもっとギデンズの原典や社会学の研究にも触れる予定が、日常の授業準備に追われて、原稿の締め切りに間に合わず、このようなかたちとなったことをお許しいただきたい。いわば、この小論は、欧米の地理学者が、ギデンズの構造化理論に対して示した意見を、筆者なりに整理した試考ノートであるとお考えいただきたい。

あえて、門外漢の地理学者が社会学に言及するリスクをおかしたのは、桃

山学院大学に就任以来、永年お世話になった、社会学者の北川紀男教授のご定年退職記念として、『社会学論集』にこの小論を投稿させていただくことになったからである。先生の今後のご多幸とご健康を祈り、しめくりのことばとしたい。

引用文献

- Carlstein, T. (1981) : 'The sociology of structuration in time and space: a time-geographic assessment of Giddens's theory' *Svensk Geografisk Årsbok*, 57, pp.41-57.
- Ellegård, K., Hägerstrand, T. and Lenntorp, B. (1977) : 'Activity organization and the generation of daily travel: two future alternatives' *Economic Geography*, 53, pp.126-152.
- Giddens, A. (1976) : *New rules of sociological method - A positive critique of interpretative sociologies*, Basic Books.
- Giddens, A. (1979) : *Central problems in social theory: Action, structure and contradiction in social analysis*, MacMillan.
- Giddens, A. (1985) : 'Time, space and regionalisation' (Gregory, D. and Urry, J. eds. *Social Relations and Spatial Structures*, MacMillan), pp.265-295.
- Golledge, R. G. and Stimson, R. J. (1987) : *Analytical behavioural geography*, Croom Helm.
- Gregory, D. (1978) : *Ideology, science, and human geography*, Hutchison University Press.
- Gregory, D. (1981) : 'Human agency and human geography' *Transactions of the Institute of British Geographers, New Ser.*, 6, pp.1-18.
- Gregson, N. (1986) : 'On duality and dualism: the case of structuration and time geography' *Progress in Human Geography*, 10, 1986, pp.184-205.
- Gregson, N. (1987) : 'Structuration theory: some thoughts on the possibilities for empirical research' *Environment and Planning, Ser. D*, 5, pp.73-91.
- Hägerstrand, T. (1970) : 'What about people in Regional Science' *Papers of the Regional Science Association*, 24, pp.7-21.
- Ley, D. (1977) : 'Social geography and the taken-for-granted world'

- Transactions of the Institute of British Geographers, New Ser.*, 2, pp.498-512.
- Peet, R. (1998) : *Modern geographical thought*, Blackwell.
- Pred, A. (1977) : 'The choreography of existence: comments on Hagerstrand's time-geography and its usefulness' *Economic Geography*, 53, pp.207-221.
- Pred, A. (1981) : 'Social reproduction and the time-geography of everyday life' *Geografiska Annaler, Ser, B*, 63, pp.5-22.
- Pred, A. (1983) : 'Structuration and place: on the becoming sense of place and structuring of feeling' *Journal of the Theory of Social Behaviour*, 13, pp.45-68.
- Pred, A. (1984) : 'Place as historically contingent process: structuration and the time-geography of becoming places' *Annals of the Association of American Geographers*, 74, pp.279-297.
- Smith, S. J. (1984) : 'Practicing humanistic geography' *Annals of the Association of American Geographers*, 74, pp.353-374.
- Storper, M. (1985) : 'The spatial and temporal constitution of social action: a critical reading of Giddens' *Environment and Planning, Ser.D*, 1985, pp.407-424.
- Thrift, N. J. (1983) : 'On the determination of social action in space and time' *Environment and Planning, Ser. D*, 1, pp.23-57.
- Thrift, N. (1984) 'The book review: Giddens (1981) : *A contemporary critique of historical materialism*' *Progress in Human Geography*, 8, pp.139-142.
- Thrift, N. (1985) : 'Bear and mouse or bear and tree? Anthony Giddens's reconstitution of social theory' *Sociology*, 19, pp.609-623.
- Thrift, N. and Pred A. (1981) : 'Time geography: a new beginning' *Progress in Human Geography*, 5, pp.277-286.